好きこそものの上手なれ

第42話

回胴倒錯者

—PACHISLO FREAK—

鯔背（いなせ）

H班長、U班長が辞める2ヶ月ほど前、ある人物が入社していた。面接の時から他とは一風変わった雰囲気を持っており、若さとやる気を兼ね備えた好青年のY君だ。言葉遣いも礼儀正しく、成人式を迎えたばかりの成年とは思えないほどだった。上司の命令には一切口答えせずそれを実行し、自分でやろうとする向上心も十二分にあった。

U、H班長が辞めてしばらくたったある日、店長が話しかけてきた。

「Yの様子はどうだ？」

「仕事にはとても熱心で、マナーの悪いお客さんにも果敢に声をかけています。K班長も頼りにしている存在です。従業員からは仕事面での評判は我々同様良いようですが、少し変わった面が多いと聞きます。」

「ふーん、お前も大変だろうから班長にしてみるか。だめなら降格させればいいだけだし。ヒャハハ！」

「そうしていただけると助かります。K君の刺激になるかもしれませんし」

「それは無いな！Kはボーっとしてるからな、ヒャハハ！」

こうしてY君の班長昇格が決定した。いきいきと働いているY君にしてみれば、すごく嬉しかったようで、さらにやる気を出している様子が容易にわかった。ただ、私個人としては一つ気になることがあった。それはY君が従業員の中でも一番若いということだ。その点だけみんなの前で説明しておかないと、統制が乱れるような気がしたのである。ふと昔の経験が頭をよぎった。

記憶

過去にこのホールには40歳過ぎの男性社員がいた。開店当初からの社員で私やM副主任、T副主任らと同期の男性だ。その男性は従業員の中で最高齢だった。Mさんの班長昇格時には特に何も無かったのだが（Mさんの場合開店初日に昇格だったからかもしれないが）Tさんの班長昇格時はかなりのもめごとになった。その男性からしてみれば、自分よりも年下で入社も同じものが自分より上の立場になることが気に入らなかったようだ。周りの従業員に班長になるべきは私だと言いまわり、食堂のおばちゃんや近所のスナックのママにもその怒りをぶちまけていたようだ。M副主任の指示で決められるホールの役割分担にて私はいつもフリーという立場（フリーに動け、各担当コースの者のフォローなどをする）を与えられていたがその男性はフリーの立場すら与えられたことは無かった。おかげでその男性の怒りの矛先は私を含め、それを決めるM副主任にも向けられていった。M副主任はその男性に対し、なぜ自分がそういった立場や役割しか与えられないのかなどをよく話していたが、誰よりも仕事ができると思っていたその男性には全く理解ができないようだった。社員だけでなくアルバイト従業員からも煙たがれ、日に日にその男性は孤立していった。そして暫く後、その男性は店を去っていった。もしこの男性が一番若ければ、きっとこういう事態にはならなかったように思う。そして上役は昇降格を含め何らかのイベントがあるときは、必ずその明確な理由を伝えなければいけない。せめてそれがあれば、ほんの少しだとしても納得する気持ちを持てたに違いなかったからだ。

互譲

Y君の昇格が決まった次の日の朝礼で、その旨をみんなに伝えた。

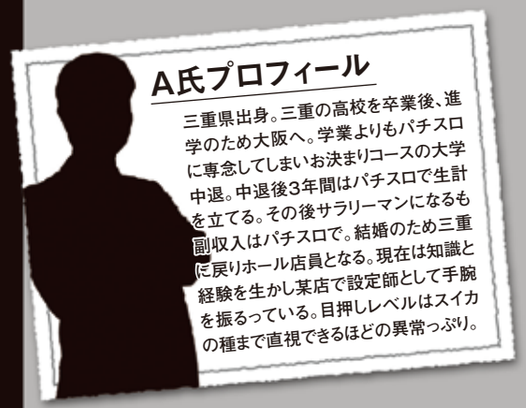
「昨日、Y君についていろいろ店長から尋ねられました。Y君を班長にするかどうかの質問でした。今、Y君が班長になったということは私や店長が認めたからです。ただ、Y君はまだまだ若く、みんなから見ても年下になります。人生経験としてはみんなが先輩です。若いからこそ分からないことや、無鉄砲になってしまうこともあると思います。そういうときは協力して助けてあげてください。Y君も自分は上司であるという意識と共に、後輩であるという意識を忘れないでください。お互いがお互いを尊重し、良いところを吸収し合ってください。これは私からのお願いです。」

それを聞いた新班長Y君は、

「わかりました。みなさんよろしくお願いします。足らないところは遠慮なく言ってください。主任もお願いします」

こう言うと、深々と一礼をしていた。

このとき私は相変わらずの礼儀正しさに感心し、Y君なら大丈夫、この考えが揺るぎない物に変わっていた。



A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。

再燃

私の勤務体制はUとHの二人の班長の引退で激務再来だったが、Y班長の頑張りのおかげで負担もずいぶん軽くなっていた。さらに、休日を取ることも可能になっており再び充実度は上がっていた。

休み明けのある朝、いつもの様に店の開店準備を終えると、お客さんの入場を監視するために事務所内からカメラでホール内を見つめていた（掛け持ち遊技等の不正を防ぐため）。先頭で入場してきた男性はいの一番に吉宗に着席した。なんの迷いも無く、あらかじめ座る台を決めてきたかのような印象だった。（前日に天井近くで止めた台か、ボーナス直後に閉店を迎えてしまった台だろう）私はこのときこのように考えていた。

数時間が経過し、ふとホールを見渡すと朝の先頭入場のお客さんがまだ同じ台を打っていた。データ表示機を確認すると、そこには意外な数字が並んでいる。BIGもREGも1度も当選しておらず、回転数は1900ゲームを超えている。残酷な朝から天井である。あれ？朝から天井ということは、設定変更か前日ボーナス後即ヤメということになる。いそぎ事務所に戻り設定表にてその台の設定を確認してみた。そこに書かれていた設定は魅惑の設定6である。これは偶然なのだろうか？1900ゲーム回すのにかかる資金は6万円を越える。普通ではない。ただ、今日は設定6を多数投入するイベントでもあるので、高確演出などから設定変更を見破り、設定6だと信じて打っているとも考えられなくもない。それともまさかまた店長が…？前科があるので後者の方がどうしても「ありえる」と思ってしまう。とりあえず店長が出勤してきたら少し探ってみよう。

疑惑

午後3時過ぎのいつも通りの時間に店長は出勤してきた。さっそく私が口を開く。

「おはようございます。最近は僕が休みのときでも手抜きせずに設定変更して下さってるんですね」

「お前の休みのときは、設定変更をKにやらせているからな。だってめんどうくさいだろ。ヒャハハ！」

「なるほどそういうことですか。少し気になることがあります、波風立たないうちに対応したいので、少し協力していただけませんか？」

私のこの誘いに興味深そうに乗ってくる。

「え、なになに？何かあったの？」

私は監視カメラを操作し、吉宗のお客さんをズームした。

「この男、朝から迷い無くこの台に座りました。さらに天井と言う最悪なスタートでしたが、止めずに打ち続けました。朝一現金で天井到達です。で、この台の設定は6です」

「なるほど、それはちょっとおかしいねぇ。Kを信用した俺がバカだったか。今日呼びつけて文句言ってやる！」

そう怒りをあらわにしている店長に対し、私はなだめるように言った。

「ちょっと待ってください。ただ呼びつけて文句を言うだけでは面白くありません。最初に協力してくださいって言ったでしょう。私に策があります」

この私の発言を聞いて店長の怒りの表情は一変し、よからぬ事を思いついた子供の様に目を輝かせていた。

「なになに？どんな策？わくわくしちゃうねぇ」

私はその「策」を店長に告げた。

「うひゃひゃ！いいねそれ！俺を裏切った罰だコノヤロー」

それを聞いた店長の顔は、子供の表情から一変し、悪魔と化していた。

◆次回予告◆

はたしてA氏発案の「策」とは？そしてそれは炸裂するのか？次回「偽計」乞うご期待！